

生涯スポーツ時代における学校体育

大飼義秀

緒 言

余暇開発センターの報告書¹⁾(平成2年4月)によれば、一年間にスポーツに参加した人は、延べ人数でジョギングやマラソンが2,620万人、水泳が2,680万人、テニスが1,410万人、ゴルフが1,370万人に達している。この数値にみられるように、確かにスポーツは急速に普及し、大衆化が促進しつつある。スポーツ・ファッションやスポーツ用具が日常化し、街にはスポーツの話題が満ち溢れている。また、幼児や子供を対象にするスイミング・スクールをはじめとするスポーツ教室や塾は盛況をきわめ、老人たちのゲートボールも盛んである。

「生涯スポーツ」はなお未確定な言葉ではあるが、「すべての人がそれぞれのライフ・サイクルに応じて、運動の楽しさと健康を求めて自発的に行うスポーツ」と理解すれば、現在のスポーツの状況は、生涯スポーツの時代であると言えよう。「生涯スポーツ」という言葉は、臨時教育審議会第四次答申をベースにした生涯学習社会へのシフトを軸にして、一挙に時代のキー・ワードとなった。かつてフランスの教育学者P・ラングラン²⁾は、その著『生涯教育入門』の中で人間の一生涯を通じたあらゆる文化的活動の中に、スポーツが位置づけられることの重要性を説いている。彼の主張を待つまでもなく、生涯スポーツとは人間がその生涯にわたり文化としてのスポーツを学習し、享受し、生活化すること、つまりスポーツを生涯化することである。このような意味での生涯スポーツの捉え方は、生涯にわたる人間とスポーツとの関わりの様態を指しながら、そこで展開されるスポーツ参加者の意識や態度を問題にしている。このことは人々の生涯にわたるスポーツへの意識、態度の内面化を問題にすることによって、その内面化を形成し達成させるための人間とスポーツの共通な一般的、普遍的な関わり合いの要因について探らなければならない。

また、生涯スポーツを志向する学校体育のあり方も、それを取り巻く社会情勢の変化を抜きにしては考えられないのであり、生涯スポーツ志向の社会的背景を明らかにすることによって、より一層それにつながる学校体育の内容に対する基本的な捉え方を明確にする糸口が得られると考える。

1. 学校体育の思潮の変遷

現状のスポーツの大衆化は、学校体育の大きな成果と言えるだろうか。このような生涯スポーツの状況と学校体育はつながっているだろうか。相変わらず「二列横隊のあいさつ」からはじまり、画一的な運動を教師の指示にしたがってくり返している多くの授業があったり、課外のスポーツも伝統的な運動部中心型で進められ、スポーツの楽しみよりも競技会での勝利を専ら重視するエリート・スポーツ志向も根強い。当然、社会変化の中で生じた人間と運動の新しい関係を配慮し、子供達の生涯における運動との結びつきを重視する授業の工夫も行われている。しかし、このように新しい授業作りに熱心に取り組んでいる教師からは、体育の多くの現実が旧態然としてあり、多くの学校においては、新しい考えに立った体育の研究に強い抵抗があると言われる。こうした現状から推察すれば、生涯スポーツと学校体育はほとんど無縁であると言わざるを得ない。

人間と運動との関係は、固定的、一義的なものではなく、歴史的、社会的に変化するものであり、体育全般に対する考え方もその変化に応じて柔軟に考えられるべきものである。³⁾社会生活におけるスポーツの隆盛は、現代社会における運動不足や健康不安にスポーツの必要性和生活水準の一般的な上昇や自由時間の増大によるスポーツの可能性が、マスコミとスポーツ産業によって組織されたものにほかならないのである。⁴⁾現代産業の特徴は、人々の欲望に形を与え、具体化し、それを方向づけることだと言われる。欲望を高進させ、その充足を金銭によってあがなわせる。これが現在産業の戦略である。現状におけるスポーツの隆盛は、こうした商業主義を物語るものであり、そこでは、スポーツの楽しさが金で買われ、人々は「楽しませられる」のである。⁵⁾だから、現代の生涯スポーツには様々な問題が生じている。いたずらに技術向上を求めた結果、スポーツ障害で悩む子供達、何時間も自分たちの仲間だけでコートを独占する主婦。このように生涯スポーツの現実には多くの問題を抱えているのである。

だれもが健康で充実した人生が送れるように、人々の

生活における運動をめぐる問題を解決する力を持った子供達を育てることは、体育の基本的な使命である。多くの問題を抱えている生涯スポーツが現実となっている以上、体育はこれに対応し、生涯スポーツに結びつき、その質を向上させるように働きかけなければならない。こうした視点から見れば、現状の体育には改善されねばならない多くの問題が残されている。

体育は、それぞれの社会における人間と運動との関係に基づいて、その目標や内容、そして方法を規定する基本的な思想を形成してきた。産業化を求め、戦争の危機に対応しなければならなかった近代社会における体育は、運動によって労働力および兵力としての身体を形成する唯一の教科として出発した。体育は「身体教育」であることによって知育、徳育と並ぶ三本柱の一つとされ、労働力と兵力の育成に役立つ「身体教育」であることによって国家の公認と強い支持を受け、制度的に確立されたのである。どのような個人社会も健康に成熟した身体に価値を置くから、そのための教育的配慮は重要なことである。したがって、体育や運動を手段とする「身体教育」とする考え方は、伝統的で強力な思想となった。教科の固有の価値と国家的な実用性こそが、そこに結びついたのである。しかし、教育の基礎、三本柱の一つとしてどのように重視されたとしても、身体教育は器の教育であり、精神の教育に従属する位置のままであった。身体にどのような価値を置こうとも、教育の対象として物化された身体は隷属的なものになる。そして身体は精神の隷属の結果し、教育に置ける身心二元論の否定を生むことになる。⁶⁾ こうして戦後の体育は、「運動を手段として全人格を形成する」教科とされる。つまり教科としての固有性は、教育の目標ではなく、教育の方法にあることになったのである。しかし身体教育から運動による教育への転換は、運動を教育の手段とする限りで共通の基盤になっていた。しかも全人教育という目標は抽象的で、それを実現する体育に固有な具体的方法も不明であったから、体育こそ全人教育が可能な教科だと考えて熱心に実践を工夫する教師も少なくない一方で、「たてまえば全人教育、実質は体力づくり」として行われた体育も、現実にはきわめて多かったのである。

人々の生活の中で、スポーツや体操、ダンスが重要な意味と価値を持つことができれば、こうした運動の教育的な意味は「発達のための手段」に限定される。産業化を求める社会では、生活における運動の大部分は仕事と作業のためであり、体育における運動は生活の内容にはなれなかった。身体であれ、全人であれ、運動を発達期における手段としてしか捉えられなかった社会では、

「運動手段論」が体育の思想の主流となるのである。つまり、現代社会における体育思潮の変遷は、「身体教育」「運動やスポーツを通しての教育」の時代を経て「スポーツを目的・内容とする教育」の時代へと移っている。この運動に対する考え方は、スポーツや運動をそれ以外に外在する価値 (extrinsic value) の達成のための手段としての位置づけようとした社会から、スポーツや運動それ自身に内在する固有の価値 (intrinsic value) として、活動自体の楽しさや喜びを容認し、さらに積極的にその価値を必要とする社会への変化として捉えることができる。⁷⁾

学校体育が生涯スポーツにつながるためには、現代社会における人間と運動の関係を考え、教育における運動の手段的機能に配慮しながらも、運動を教育の目的・内容として捉える考え方が重要になってこよう。そのためには、人間にとっての運動の意味と価値を個人と社会の二つの側面から再検討し、自己の体育思想を確立しなければならない。

2. 生涯スポーツの視点からの学校体育

現代社会におけるこのような変化をスポーツとの関連でさらに詳細に見てみると、技術革新による時間的、経済的余裕や仕事中心から趣味、健康、仕事、家庭の調和をめざす生きがいの変化が、スポーツの客観的可能性を高めると同時にスポーツ欲求への高まりを生じさせている。同じく技術革新が機械化、省力化を促進した結果、身体的には運動不足を精神的には人間阻害を引き起こし、都市化や高齢化社会の到来は人々に健康・体力の維持を強く認識させ、いずれもスポーツの必要性の高まりを生じせしめている。このように現代社会を特徴づける多くの状況は、人々の生涯にわたる運動欲求やその必要を高める要素をはらんでおり、現代社会においては、特にそれを人間と運動の intrinsic な結びつきの中で解決し、人々に健康で文化的な生活を保障する課題が課せられているのである。

現代社会における学校体育の目的は、現在から将来に向けて要請されるこのような社会的必要性から生涯スポーツを志向した主体の形成を目指すことになる。すなわち、生涯にわたって運動を愛好し、運動へ自発的、自主的に取り組める主体の形成をめざすものである。この実現のためには、体育の授業における学習と指導が、児童・生徒に対して生涯につながる運動への愛好的・肯定的態度を形成するようになされなければならない。また、その学習内容も各発達段階に応じて生涯につながる運動への知識や技能、ルール、マナーを通じた運動の楽しみ方や

その工夫の仕方を学習するものでなければならない。つまり、学習内容を子供達の手に戻すことによって彼らの側から捉え直し、生涯を通じて行われる運動種目とその学習の道筋の点から再検討を図る必要がある。

体育に限らず、学校における学習は基本的には強制的な性格を持って行われてきた。将来の生活への準備として組織され、特権への階段として機能してきた学校の授業では、子供達は学ぶことの意味や価値を学習そのものの過程において具体的に獲得するのではなく、結果としての成績によって知らされてきたのである。学習は、学ぶことの本质にある自己が高まり、自己の世界が広がっていく楽しさや喜びに支えられていたのではなく、報酬や賞罰などの学習の外にある意味や価値によって進められ、動機づけられてきた。⁸⁾

学習での成績が他人との競争の基準になり、競争に勝った者が社会生活における特権を獲得する。こうしたメリット・システムと化した学歴社会の学校は、学習を必要悪と感じさせ、学習を進めれば進めるほど、学習がいやになり、嫌いにする子供をつくってきたといえよう。学習が仕事と結びつくならば、その性格は義務となり、それゆえ強制的な指導の形態がとられる。学習される内容が、魅力がなく、欲求を導かないものであるが、絶対に学習されなければならないものであるならば、それは強制的な学習指導になるだろう。また、学習の結果が本当に役立つならば、強制的な学習も意味を持つだろう。しかし、変化の激しい社会では学習させるべき確実な知識や技術は少なく、学校で学習を完成させることは不可能になっている。これからの子供達は、欲求と具体的な必要に応じて生涯学習を進めなければならないのである。

運動についても同様である。運動手段論に立っていたこれまでの体育では、運動そのものの意味や価値は軽視され、運動の結果が重視されていた。運動の学習は、運動を行うことの喜びや楽しさによって動機づけられたのではなく、運動を行った結果としての教育的効果を中心に組織されてきたのである。⁹⁾運動に内在する意味や価値が軽視され、運動をただ鍛えるための手段とするならば、内容としての運動はほとんど意味を持たず、何でもよく活動が活発に行われればよいとされる。指導要録の評価に従った学習評価をするために、能力の序列化が行われ、そのために学習内容が画一化される。「できる・できない」が共通の基準で測定されねばならないからである。また、画一的な内容は学習活動を簡単に序列づけるし、意味や価値を含まない形としての運動は捉えやすい。しかも運動の仕組みを分析することによって、内容の構造的な発展が容易に捉えられ、形骸化されるにして

も明白な共通の学習過程をつくることができるからである。

しかし、成就や達成の可能性の少ない画一的な内容は、多くの子供達にとって魅力も興味も少ない。つまらない、役に立たない内容を学習させ、しかも活発に活動させるためには教師の指導はますます強制的な性格を強くする。命令、号令、指示、そして厳しい罰が運動の学習を秩序づけてきたのである。体育教師に権力的な印象を強く持っている子供達が少なくないのはこのためである。実際、運動手段論が根強く残っている背景には、「鍛えてやる、育ててやる」という教師の思い上がった教育愛があり、弱者に対する強者の、子供達に対する教師の特権意識が潜在化している。それは、運動を教育の目的・内容として位置づけられないことに対するコンプレックスの裏返しでもある。こうしたコンプレックスは、運動と身体を卑下する近代文明の偏見に基づくもので、体育においてこそこの偏見と軽蔑を是正する運動の学習が進められなければならないのである。

生涯スポーツは、その性格からみてレジャーにおいて自発的に行われる活動であり、個人の主体的な選択によって行われるものである。だから、スポーツの意味と価値が本当に学ばれ理解されるならば、すべての人が生涯スポーツの主体的な実践者になるであろう。生涯スポーツにつながる学校体育は、行う者にとっての運動の意味と価値は、欲求あるいは必要を充足する運動の機能にある。人は、そのような機能的特性を求めて自発的に運動に参加し、創意、工夫、努力をするのである。すべての子供が、機能的な特性を求め、それにふれながら運動に取り組むことができるならば、学習は基本的に自発的な活動となる。そのような学習を進めるためには、すべての子供がその機能的な特性を求め、ふれられる内容が準備されねばならない。つまり、内容は個人差に応じて多様でなければならないのである。

生涯スポーツは運動の内容を固定化できない。人は好みと条件に応じて、そしてライフ・サイクルに応じて、自分に最も適した運動を選択すればよいからである。つまり、生涯スポーツにつながる体育では、絶対に学習されねばならない運動は固定できず、したがって必要な技能の共通の到達水準もないことになる。だから、これからの体育では、自分の力に応じた内容を選択し、自発的に運動の学習を進めることが重要になる。学習のペースも個人の発達のリズムに合うように工夫されねばならない。

3. 生涯スポーツにつながる学習内容とその取り上げ方

まず生涯にわたって実施可能な運動種目の点から学習内容を検討し、学習者の生涯にわたるスポーツ参加への内的態度の形成という点から、学習内容の取り扱いとその発展としての単元計画についての基本的考え方を探ってみる。

嘉戸¹⁰⁾は、総理府が行った調査資料から各運動種目の生涯継続度に着目し、「生涯スポーツ種目」の分類を試みている。

それによれば、

- ① 生涯スポーツの傾向がかなり強く、希望もかなり高い種目
 - ・両性型 … 体操、テニス、ボウリング、卓球、ランニング、水泳等
 - ・男性型 … ゴルフ、ソフトボール
 - ・女子型 … バレーボール、フォークダンス、民踊等
- ② 生涯スポーツの傾向はみられるが、希望はやや低い種目
 - ・両性型 … ハイキング、サイクリング等
- ③ 生涯スポーツの傾向の弱い種目（40代で5%以下）
 - ・陸上競技、柔道・剣道、サッカー等

このように分類された生涯スポーツ種目と呼ぶべき運動種目を、現行の指導要領に即した学校体育にそのまま導入するとすれば、かなりの体育諸条件の整備、とりわけ物理的、人的な条件の整備を必要とするであろう。もし、これらの運動種目をそのまま学習内容として採用できる諸条件が整っていたとしても、その種目がはたして学習者の関心や能力等のレディネスに合致した内容であるかどうかは大いに検討すべきである。むしろその視点からの適切な運動種目の取り上げ方の方が、より重要な課題であろうと思われる。その意味で、生涯スポーツへ連続する学習内容をスポーツの種目のみから形式的に捉えようとするのは困難であろうし、また危険でもありと考えられる。

したがって、生涯スポーツ種目の全体的傾向はそれとしておいて、現行の学習指導要領で取り上げられている種目がなぜこれまで生涯スポーツに結びついてこなかったのか、その原因についてもう一度考え、学習内容の進め方に関する基本理念とその取り上げ方を検討してみる必要がある。それは従来からの体育におけるスポーツが、学習者の自発性、自主性を尊重し、内在的価値をもつそれとして学習されてこなかったことに起因していると考えられる。また、たとえスポーツを愛好するものが育ったとしても、卒業後それを実施しうる社会的諸条件

とスポーツ体制が存在しなかったことも考えられる。

いずれにせよ、生涯スポーツにつながる学習内容について、形式的にそれに適した種目の採用だけから見直すのではなく、現行の採用種目の範囲で学習者の発達段階や興味、関心、能力等のレディネスをなるべく詳細に具体的に把握し、それに合致した種目の取り上げ方、進め方を行うことが必要である。

4. 生涯にわたるスポーツ参加への意識、態度を育成するという観点から

スポーツ参加への意識や態度は、スポーツに対する興味や関心が高まり、スポーツの価値を直接的に内面化する程度が高まれば自ずから育成され、形成されていくものと考えられる。¹¹⁾このような観点から学校体育における学習者のレディネスと運動種目との関わり合いを検討すれば、基本的には各学校段階でなるべく各発達期の学習者の興味、関心に合った運動種目を取り入れていくことが考えられる。この学習者のレディネスを主軸として、各学校期における学習内容としての運動種目の取り上げ方に関する基本的な考え方は次のようになる。

小学校期における児童・生徒の運動への興味・関心は、一般的に非常に高く、特性の異なる様々な種目に対する好奇心と意欲が旺盛な時期と考えられる。したがって、この期の体育の学習では、体力的なレディネスを考慮しつつも、このような心的レディネスを基盤として、なるべく多くのスポーツに接することができるような内容への配慮が必要である。この結果として、スポーツへの愛好的態度に対する基盤が形成されるとともに、さらに、学習者が楽しさ欲求を充足することの中で、ごく自然な形で次第に各運動種目実施に必要な基礎的運動技能を身につけたり、各発達課題としての体力的、精神的、社会的要素を達成することが期待される。

中学校期は、小学校期と比較して運動への関心度、運動種目に対する好嫌度がより明確になってくる時期と考えられる。このことは、学習者の中に自分の好みに合ったスポーツを選択する自発的態度が芽生えてくることを意味する。この選択による自発的な運動参加への意欲と自主的な運動実施に向けての推進力の養成は、生涯スポーツへの連係という点で極めて重要である。したがって、中学校期では、身体的、情緒的レディネスに応じた種目の中で、自己の興味、関心、体力、技能等の観点からそれらに適した種目を見つけるような内容の柔軟な取り扱いが必要となってくる。小学校期からのつながりで言えば、主に中学一・二年生の段階では、小学校期で学習された内容からの選択種目プラス中学校期の生徒のレディ

ネスに応じた新たな種目、によって内容を構成し、三年生の段階では、これら既学習の種目の中からこれまでの自己の運動経験に照らして、自分に合った運動を選択し学習していくことが考えられよう。

高校期では、さらにこの期のレディネスに応じた新たな種目を取り上げる中で運動種目の選択の幅を広げ、かつその選択された種目に対する学習を深めることによって、生涯にわたるスポーツへの是認的、愛好的態度を確固としたものにしていけることが考えられる。

このように、学習内容に関して、どの学校段階においても学習者が運動へのレディネスの状況に応じて自発的に運動を選択し、自主的に学習が展開できるように配慮することは、小・中・高校期の学習内容を生涯スポーツにつなげ、あるいはそれを目指した一貫性のあるものになると考えられる。

5. 重点種目制導入の試み

その運動種目が各発達期の学習者にとって系統的な学習の道筋をたどり、自発的・自主的学習を可能にするか否かの観点から、その取り扱いを再考することも重要な点である。

一般に、クラブ活動実施者が生涯スポーツ実施者となりやすい理由は、クラブでの種目に対する重点的な学習の機会とそれに基づくスポーツ一般への愛好的態度育成によるものであると言われている。¹¹⁾これに対し、学校

体育では、指導要領等との関連から各学校期を通じて一つの種目に配当できる時間数に制限があり、どうしても小単元的な細切れの授業になりがちである。しかし、これでは限られた時間内に効率よく授業を展開しようとするあまり、教師のねらいと学習者のめあてとするものの間にズレが生じ学習が表面的な様相を呈し、次時への質的な深まりが期待できない。特に、学習者一人ひとりの自発的・自主的な学習への発展と運動の特性に十分にふれるまでの高まりが保証できない。そこで、学校間、学年間の運動領域を見通した上で、地域、学校、学年、学級に応じた重点種目とそれ以外の種目とを計画的に構成しながら年間の単元を再検討し、前者を主単元、後者を副単元として位置づけることによって、より大きな単元を生みだせるような試みも重要になってくると思われる。

生涯スポーツにつながる体育を実践するためには、なお多くの問題が残されている。たとえば、運動手段論の立場に立って工夫されてきた、偏りのない運動刺激を与えるための機会均等・平等主義のカリキュラムの編成は、細切れに内容を取り上げ、学習を急がせる。自発的な活動が導きやすく、しかも組織的な学習が成立しうる機能的な特性が明確な豊かな内容を持った運動が精選され、余裕のある単元になるようカリキュラムが検討されねばならない。そして、基本的な学習の進め方が理解されたなら、子供達が自分で積極的に内容を選択し、学習を進めてゆく「選択性」が取られなければならない。

引 用 文 献

- 1) 財団法人 余暇開発センター 『レジャー白書 '90』1990年 32頁
- 2) P.ラングラン 波多野完治訳『生涯教育入門』1971年 45-50頁 全日本社会教育連合会
- 3) 桑野豊 「生涯スポーツ時代の体育・スポーツ」『学校体育』1990年11月号 11-13頁 日本体育社
- 4) 犬飼義秀「健康とスポーツに関する一研究—主体的スポーツへ向けて」岡山県立短期大学紀要 第32号1巻 1988年 34-39頁
- 5) 佐伯聰夫 「現代スポーツの課題と展望」『現代スポーツの社会学』1984年 304-307頁 不昧堂出版
- 6) 塩川徹也「身心関係論の展開」『岩波講座9 身体 感覚 精神』1986年 38-60頁 岩波書店
- 7) 松田岩男「新しい教育課程の改善の方向と今後の体育」『学校体育』1987年 3月号 12-19頁 日本体育社
- 8) 梶田淑一『子どもの自己概念と教育』1985年 112-115頁 東大出版会
- 9) 竹之下休蔵「学習を深めることがなぜ求められるか」『学校体育』1985年 4月号 12-19頁 日本体育社
- 10) 嘉戸脩「生涯スポーツの立場からみた重点教材」『体育科教育』1984年 3月号 38-40頁 大修館書店
- 11) 犬飼義秀「体育授業の運動の楽しさに関する因子分析的研究」岡山県立短期大学研究紀要 第31巻 1987年 53-64頁

平成3年10月18日受付

平成3年11月7日受理